



# 1 山尾次吉《諫鼓形香炉》

明治三十三年（一九〇〇）

彫金

総一八〇×二九・五×四五・三

諫鼓とは、中国の伝説上の聖天子堯、舜、禹がその施政について諫言しようとする人民に打ち鳴らさせようと、朝廷の門外に設けた太鼓、諫めの鼓（太鼓）のことである。その太鼓は打たれることなく泰平の世が続き、ついに太鼓は苔に覆われた、という故事により、諫鼓は泰平を象徴する。『和漢朗詠集』（一〇一八年頃成立）の「帝王」には「諫鼓苔深鳥不驚（諫鼓苔深くして鳥驚かず）」とある。この鳥が、いつしかニワトリに結びつき、苔が生えた太鼓は、蕨が絡まる太鼓へと変化した。少なくとも江戸時代後期（十九世紀）には、蕨の絡まる太鼓にニワトリが棲み着いているイメージが形作られている。そして太鼓よりもニワトリが主体となって華やかに表現されるようになっていく。

本作は、雄鶏が太鼓に片足で立つ諫鼓鶏の香炉で、太鼓部分に香炉を納め、ニワトリの足元が蓋となっている。色金を駆使した華やかな作品で、加賀象嵌の名工である山尾次吉（一八六二～一九二三）による。透かし彫りで巧みに蕨を表した木彫の台をともしなう。底裏に「長武刀」の刻銘があるが、台の作者については不詳である。明治三十三年、皇太子嘉仁親王御成婚の折に、住友吉左衛門より献上された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

鳥の楽園 — 多彩、多様な美の表現

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 68

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年三月二十一日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan